

1

特集 高齢者の美容医療

高齢者が化粧品や染毛剤を選ぶときに気をつけること

関東裕美

東邦大学 医学部 皮膚科 客員教授

スキンケアの基本は洗顔・保湿そして光老化対策とされ、文化的生活を営む私たちにとって、出生時から生きている間は男性も女性も快適な生活維持のために必要な生活習慣である。高齢化社会となった現在、若々しく美しく在るために化粧品や染毛剤は有用なことが多い。ただし年齢とともに変化する皮膚状況に応じて的確なスキンケアができないと皮膚障害が生じてしまう。化粧品や染毛剤による皮膚炎治療時には、患者の生活の質を損ねないようにその原因を把握して適切な代替製品の指導を行うことが必要である。

はじめに

総務省統計局では65歳以上を高齢者として扱い、国民保健の向上および高齢者の福祉の増進を図ることを目的とした各種法令では、65～74歳までを前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と規定している。国や地域において高齢者が人口の7%を超えると高齢化社会と評価され、日本ではすでに2007年に21.5%となり、2018年時点では高齢化率28.1%で超高齢社会となった。国家対策として、あらゆる分野に参加、貢献の機会が高齢者にも与えられむしろ委ねざるをえない状況であるのも理解できる。実際、高齢者が働きやすい環境整備がなされ、70代でも男性は約3割、女性は2割を超える人が就業しているとされる。

認知症有病率も65歳未満の労働年齢層では2～10%とまれであるが、80歳を超えると急に高まるともいわれ、社会とのかかわりが認知症を進めない要因となっていることがうかがわれる。高齢者就業を継続可能にする支援、対策に医療と美容は必要で、社会参加に化粧品や染毛剤が不可欠な場合もある。

高齢者の化粧品皮膚炎

高齢者の社会参加により各自が健康寿命を維持することができ、見られているのを意識して過ごしていれば認知症予防にも大切であることが報告されている¹⁾。ただし年

齢を重ねるごとに、その生活は健康状態、生活環境、生活様式などさまざまな要因によって変化してくるが、適応できずに皮膚障害を起こすことがある。

高齢者に影響を及ぼす重大な問題として、損傷後の表皮バリア機能の障害と皮膚回復の遅延、血流障害などがある。年齢を重ねることでより多くの潜在的な感作物質への曝露があり、アレルギー獲得の機会も多くなる²⁾。ただし刺激やアレルギー反応を起こすような過剰免疫力は高齢者では低下してくることもあり、生理的な老化に即したスキンケアをしていれば化粧品皮膚炎が起こりやすいわけではないと考える。

男女ともに服装や化粧など身だしなみに気を使わなくなることは、認知症の初期サインでもあるので、皮膚科医としてスキンケアや化粧指導を積極的に行いながら患者の心身状態を把握することが望ましい。高齢者自身が環境の変化に適応できなくなってきた自分の皮膚能力を把握できずに日常の化粧を継続していると皮膚炎が生じてくる。

刺激性接触皮膚炎

健康な皮膚であると思って過ごしていても、年齢を重ねるにしたがい、あるいは内臓疾患や種々の治療の影響で皮膚条件は刻々と変化する。ところが目に見えている皮膚であるのに、環境の変化に適応できなくなっていることに気がつかずに日々過ごしていることが多いようである。化粧習慣がある女性は季節や年齢により化粧品を変える工夫はあるかもしれない。ただし自身の皮膚状況に応じて洗顔方法を見直す習慣はついていない。

多くの女性が化粧をしたらメイク落としをしてさらに洗顔料でしっかり洗うことが必要だと思っている。美容指導として顔面のパッチングやマッサージなど適度な刺激は皮膚能力を高めることがあるかもしれない。ただし過敏性皮膚すなわち皮膚バリア膜が体質的に弱い患者、あるいは更

年期～高齢患者には各自の皮膚能力に応じた美容指導をしないと皮膚障害を生じることがある。乾燥時期には過剰なダメージを与えないスキンケア指導、とくに洗顔料による刺激を考慮すべきである。メイク落としで顔面皮膚をこすり、さらに洗顔料でこすり取ることで容易に刺激が起こりやすい皮膚をみずから作ってしまうことを理解させる必要がある。

症例1：72歳女性

71歳時9月～12月までシミ・シワに外用・注射・レーザーなどの美容治療を継続していたが、12月から顔の赤みと腫れが漸次悪化してきた。近医で加療するも化粧で皮膚症状が隠せなくなったと精査加療目的で3月受診。毛染めも毎月するが、染毛後に皮疹が悪化した自覚はないという。

初診時臨床像は、頬の一部を除く広範囲顔面に紅褐色斑がみられ、前頸部～側頸部まで丘疹・紅斑が広がっていた(図1A)。血液検査ではWBC 5000(好酸球5.8%)、IgE 170、MASTスギ(3)、ハウスダスト(2)、TARC 621で、化粧品皮膚炎に加えスギ花粉による悪化の可能性を考えた。

毎日のスキンケア方法を聞いてみると、朝晩洗顔料を使用していたので、洗顔料は中止させた。季節的にスギ飛散時期であることから、皮膚防御目的での化粧は必要であることを指導した。原因確認目的にパッチテスト(PT)を計画し、処方した保湿剤を下地として、自身のファンデーションのみ継続使用させた。夜はメイク落としのみ使用して化粧を落とし、洗顔料は使用しないように指導し、皮疹軽快後にPTを実施した。PT結果は図1Bに示した通り、72時間判定時に染毛剤成分パラフェニレンジアミン(PPD)と金チオ硫酸ナトリウム(gold sodium thiosulfate; GST)